

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520071

研究課題名 (和文) 中世神道論成立史の研究

研究課題名 (英文) The process of forming *SHINTO* theories in the Japanese Middle Ages

研究代表者

平泉 隆房 (HIRAIZUMI TAKAFUSA)

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：20148357

研究成果の概要：中世神道論として最初に確立した伊勢神道の成立時期について検証し、平安後期の時点で外宮の祭神が皇御孫尊に変更されている点を伊勢神道 (思想) の萌芽と位置づけた。その背景には、外宮祠官の活発な関東進出などがあげられるが、一方、外宮祠官でありながら内宮遷宮に深く関与している実態も明らかにした。また、平安後期から鎌倉期にかけて、比叡山延暦寺が北陸道に寺領を獲得していく過程で、日吉社神人が北陸道の白山神人と協調しながらことをすすめていることを明らかにし、白山信仰の全国伝播に大きく貢献したことを跡づけた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	360,000	2,260,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：日本思想史

キーワード：伊勢神道 外宮祭神 二宮兼行 白山信仰 白山神人 日吉社神人 延暦寺荘園

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国最初の本格的な神道論といわれる伊勢神道については、蒙古襲来をきっかけに高まった神国思想との関連が指摘されており、外宮祠官度会氏がこれに乗じて新たな神道説を唱えた、というのが通説となっている。しかし、外宮祭神を皇御孫尊とみる説が平安後期には広く流布しており、豊受大神から皇御孫尊に変更したことだけをとっても、平安中期頃には新たな神宮祠官側の動きがあったことが予想される。つまり、通説より1世紀以上も早く、神宮祠官が関東などで神徳宣揚の一環として新たな祭神を唱えてい

たとも考えられ、神道論の萌芽をこの頃に求めることができれば、神道史の書き換えにもつながることが予想される。

(2) 報告者 (平泉) はこれまで、中世の伊勢神宮史を明らかにし、そこからさらに、伊勢神道 (思想) を核として中世神道論の成立過程を探ってきた。ただ、中世神道を明らかにするためには、伊勢神道のみならず、比叡山を中心とする天台神道や、真言神道また三輪流神道、さらには神祇官人の神道説などにも目を向ける必要があることを痛感した。加えて、学者が構築した神道論だけではなく、かかる神道思想が全国に流布していく経

緯にも関心を向けてきた。その研究の過程で、天台神道・真言神道・三輪流神道などの諸神道説には、それなりの研究の蓄積がなされてきたものの、これら諸神道説相互の交渉・交流についての研究が極めて手薄なことに気づいた。そこで、我が国の代表的な山岳信仰の一つである白山信仰に注目してみたいと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 従来の伊勢神道また伊勢神宮についての研究を振り返ると、全ての点で内宮と外宮の対立、また両宮祠官が極めて不仲であったことを前提としている。しかし、内宮遷宮の中心的役割を担った遷宮作所を検出してみたら外宮祠官度会氏が内宮の作所に任じられることも多く、ことに鎌倉中期よりはほぼ度会氏であることをつきとめた。このような内宮と外宮祠官の協調といった視点から伊勢神宮史ひいては伊勢神道（思想）そのものを改めて見直すことが求められているし、そのような事態が出現した背景についても検討が求められている。これまでの通説とは全く異なった視点より、改めて伊勢神宮や神宮祠官というものを考えてみるのが本研究の目的である。

(2) その伊勢神宮で、ことに外宮の祭神が平安末期には皇御孫尊に変更されていることは、鎌倉幕府編纂の『吾妻鏡』に明証があり、早く江戸前期の学者も指摘している。しかし、『吾妻鏡』にのみみられる孤立した説であることや、鎌倉中後期に内宮、また外宮相殿神が変更されていて、外宮相殿神が皇御孫尊であることより、その前史といった程度の軽い扱いでこれまではみられてきた。もし、この外宮祭神皇御孫尊説なるものを史料的に補強することができるならば、これは神道史の書き換えにもつながる重要事例となることが予想される。そこで外宮祭神皇御孫尊説を裏づける史料がないか博捜するのも本研究の目的である。

(3) 白山信仰が、一山岳信仰でありながら全国各地に展開していることは、現時点における白山神社の分布をみただけでも一目瞭然である。ただ、それが、いつ頃どのような人々の手によって全国に勧請されたかとなると、不明な点が多い。そして従来、この点で白山御師による江戸期の伝播を想定する傾向が強いが、極めて説得力に欠けるものである。江戸期の白山御師の活動が美濃馬場を除いて、極めて低調であることが既に知られているからである。本研究では、平安後期から鎌倉・南北朝期にかけて、延暦寺による荘園拡大のなかで、白山信仰が延暦寺僧や日吉神人などの手によって広まっていったのではないかと、といった点を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 伊勢神宮については、報告者（平泉）はここ数年その実態を研究してきており、平成11年～13年の科研費報告書でも中世伊勢神宮史に関する略年表を作成した。その後、平成17年には神宮司庁編『神宮史年表』（戎光祥出版）が刊行され、精密さは格段に向上した。そこで、前回の科研費報告書の際に作成した年表に、神宮司庁当局の許可を得てこの『神宮史年表』の必要箇所を増補し、研究者の便をはかることにした。時代的には、神道論成立との関連で注目される平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての部分を『神宮史年表』によって補った。これによって、伊勢神宮とその周辺で起こった出来事に関しては一目でその概要が知られるようになったものと思われる。

(2) 白山神社の全国分布の実態については、神社本庁が十年ほど前に全国神社に直接調査を依頼し、それをもとに國學院大学が『現代・神社の信仰分布—その歴史的経緯を考えるために—』として公表している統計データを用いて分析した。そして、この白山神社の全国分布の傾向と、日吉大社の全国分布の傾向が酷似しており、このことから、日吉信仰と白山信仰の伝播に何か関係がないかを探った。「研究の目的(3)」にも記したように、中世後期から江戸期にかけて白山御師が競って白山信仰を流布した、という通説は、美濃馬場からの流布についてはそれなりに該当するものであるが、加賀馬場、越前馬場にあてはまるとは思われない。そこで、研究対象としては平安後期から鎌倉期にかけての事例を集め、北陸道において白山勢力と延暦寺や日吉社との間に接点がないかを探った。

## 4. 研究成果

(1) 外宮祭神皇御孫尊説を追っていったところ、これが遅くとも平安末期には広まっていて、鎌倉時代を通じて有力視されていることを明らかにした。皇御孫尊を外宮相殿神とする見方に先立つ説である。そこで、外宮側が積極的に東国へ進出していく様子を検討し、その過程で祭神皇御孫尊説が出現したことを想定したが、祭神に関して内宮祠官と外宮祠官の反目があったとは思われないため、この説は内宮側にも受け入れられたとみておきたい。そして、平安後期に伊勢神宮がどのような場所と考えられていたかを考察し、「朝家」「公家」「王土」「王法」を守護し、その安泰を祈るところとみなされていたことを明らかにした。初期伊勢神道書といわれる『倭姫命世記』には、外宮が「国家」を守護する場所という記載がみられ、このような考え方と通ずるものであるように思われ、『倭姫命世記』にみられる神宮観は、まさに平安後期に主張されていたところのもので

あることを明らかにした。このような平安後期の神宮祠官による神徳宣揚の内容については、それがそのまま伊勢神道（思想）の萌芽であるように思われる。

(2) 白山信仰関連の神社は、今日全国に二千社ほどあるが、それが勧請される経緯について、石川県以北は白山比咩神社、西国は平泉寺白山神社、そして東海から関東にかけての白山信仰伸展の主な担い手は、長瀧白山神社や石徹白中居神社に関わる人たち、と考えてきた。そして、白山三馬場からそれぞれの方面に広がっていき、中世後期から近世期にかけて白山御師が勧請してまわった、との理解が一般的であったように思われる。

そういう白山信仰関係の社寺もちろんあるだろうが、本研究では、延暦寺が中世前期に庄園を拡大していく過程で、日吉社神人などの北陸方面における活発な展開と絡めて、通説とは異なる視点より検証した。白山信仰全国伝播の担い手や時代について、意外な部分があることは確かといえよう。具体的な神社名をあげての個別の論証は今後の課題である。そしてこのことは、単に勧請や伝播だけではなく、白山信仰と日吉信仰が何らかの形で連携しながら展開していくことを予想して良いものと思われる。北陸から遠く離れた奥州平泉の中尊寺には、四至を守る鎮守神として「白山社」と「日吉社」が祀られており、奥州藤原三代の時代からであることは『吾妻鏡』に明記されていることから容易に窺われる。毛越寺の一山に白王院があり、住職は志羅山氏で、その管轄下に「日吉白山寺」がある。藤原清衡の時代に平泉周辺では日吉社勢力が浸透していたことも周知のことであり、本研究でみてきたような日吉社神人との関与が問題となる。これまでの白山信仰についての研究では、このような寺院の鎮守社に白山神が祀られている事例についてほとんど見落としている。さらに白山修験の教義教学についてはこれまでほとんど論究されたこともないようだが、日吉信仰（山王信仰）との比較研究も可能かと思われる。ともあれ、平安中後期から中世前期にかけて、比叡山の勢力が全国に広まっていくのと軌を一にして白山信仰が広がっていくこと、つまり延暦寺が全国各地に庄園を獲得していくなかで、日吉信仰と白山信仰が広がっていくことを押さえた点は、白山信仰の全国的流布の説明として貴重である。その過程で、天台神道が日吉神道や白山信仰はもとより、三輪流神道や伊勢神道とも触れ合っていた可能性が高いことも推定するに至った。

(3) 鎌倉後期の永仁年間に、内宮祠官と外宮祠官とが争った皇字論争を検証していったところ、その折に外宮側が主張した「二宮

兼行」については、これまで全くの虚構として一蹴されてきた。しかし報告者（平泉）は、かつて、内宮遷宮時の内宮作所に度会氏が就く例が鎌倉期後半にはしばしばあることを明らかにし、まさに二宮兼行そのままの状況が作りだされていたことを突き止めた。内宮作所にとどまらず、度会氏が内宮遷宮実務や祭祀に深く関与していたことは確実である。そこで改めて『皇字沙汰文』『詔刀師沙汰文』をみると、外宮側の主張する「二宮兼行」説に対して、意外にも、内宮側はついにこれを否定することができなかつたのであり、これまでの研究は、外宮側のものは詭弁や偽証であるとの先入観に支配されて、きちんと検証することすら放棄していたことが明らかとなった。皇字事件について検討したところ、事件の「発端と首謀者」「内容の是非」「影響」について、大きく書き換えねばならず、伊勢神道について根強い支持のある内宮外宮並立運動説が、そのままの論拠では成り立たなくなったことを明らかにした。これまで、度会行忠による秘書化を論拠として伊勢神道の閉鎖性が強調され、内宮祠官と外宮祠官の不和を根拠として内宮に対抗するため外宮祠官がことさらに神道説を唱えたといわれてきたが、それぞれの前提自身を疑った研究者はいなかった。いずれの前提も誤解であって、このような研究に影響を与えた初期のものとして、江戸期の吉見幸和『五部書説辨』の説を紹介し批判した。

鎌倉期の内宮祠官と外宮祠官との関係については、内宮祠官優位とする見方がながくなされてきたが、むしろ外宮側の言い分にも耳を傾ける視点から、中世神宮史を書き直し書き改めていく作業が必要である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

(1) 平泉隆房、外宮祭神皇御孫尊説とその周辺、史料（皇學館大学史料編纂所報）219号、1-5頁、2009年、査読有

(2) 平泉隆房、中世前期における白山信仰全国伝播の一考察、日本学研究（金沢工業大学日本学研究所）11号、1-18頁、2008年、査読有

(3) 平泉隆房、外宮祠官度会氏の二宮兼行について、日本学研究（金沢工業大学日本学研究所）9号、69-89頁、2006年、査読有

〔学会発表〕（計1件）

(1) 平泉隆房、中世神道論成立についての一試論、金沢工業大学日本学研究所研究会、2007年2月23日、金沢工業大学

[図書] (計1件)

(1) 平泉隆房、吉川弘文館、中世伊勢神宮史の研究、2006年、330頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

平泉 隆房

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：20148357

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし